『清兵衛と瓢箪』とその英訳版の比較考察

澤　泰人

1．序

「翻訳」とは、端的に言えば、ある言語で書かれたテクストを別の言語で再構築するという一連のプロセスを指す。このプロセスは、具体的には、翻訳者自身が原典を解釈し、その作品世界をいったん構築したうえで、さらにそれにもとづいて、別の言語で作品世界を再構築することを意味する。当然ながら、こうしたプロセスを経る過程で、翻訳者の個性が介在することになる。翻訳者は、たしかに原典の制約の中にはあるものの、自己の個性・判断・責任において、ある程度の表現の自由が許されている。しかし、そうした程度の限度を越えてしまうと、いわゆる誤訳へとつながってしまう危険性もまた常に存在している[1]。あるいは、翻訳者自身の持つ知識や人生経験、さらには思想信条といった種々のものが、多かれ少なかれ、翻訳時に影響を与えるという自明のことを考えれば、誤訳を中心とする翻訳上の種々の問題が生起することもまた、宿命であるともいえる[2]。

本稿では、こうした翻訳上の問題点について、志賀直哉の『清兵衛と瓢箪』およびその英訳版２編とを比較検討しながら実地に見ていく。この際、扱う問題点を、翻訳分析で中心的な考察対象となる＜語句の意味範囲のずれ＞・＜誤訳＞・＜固有の風物・表現＞・＜訳出せず＞の４点に絞り、とりわけ＜誤訳＞と＜固有の風物・表現＞に重点を置いて考究していく。その際、作品の背景となっている大正時代初期の文化・社会的背景や作品解釈そのものにまで深く切り込むことによって、その翻訳の問題点をより鮮明に浮き彫りにしたいと考える。そして、それらの問題が発生しているがために、翻訳版を通して作品世界に対面する読者の作品理解に支障をきたしうることを逐次指摘する。その上で、翻訳版を通して読者が精確に作品を味読するという目的を達成するために、読者への配慮として、翻訳版に訳注を充実させるなどの措置が従来よりももっととられ、拡充されるべきであると主張する。

各節の構成は、以下のとおりである。まず第２節では、本稿において、『清兵衛と瓢箪』とその英訳版を考察対象として選定した理由を述べる。次に第３節で、上で挙げた翻訳時の４つの問題点がいかなるものか、具体的な説明を付与しておく。続く第４節では、実際に原典と英訳版とを比較検討し、それぞれの問題点を指摘するとともに、改善に必要な措置にも言及する。最後に第５節で、それまでの考察をまとめて結語とする。

2．作品選定の根拠

本稿で扱う作品およびその英訳版は、以下のとおりである。

［原典］

志賀直哉「清兵衛と瓢箪」、筑摩書房（編）『志賀直哉』、筑摩書房、2008 年。

［英訳］

① Trans. by Sibley, W. F. “SEIBEI AND GOURDS.” In W. F. Sibley, *THE SHIGA HERO*, The University of Chicago Press, 1979.

② Trans. by Dunlop, L. “Seibei and His Gourds.” In L. Dunlop, *The Paper Door and Other Stories*, Columbia University Press, 1987.

なお、本稿では上掲の英訳を、それぞれ順に［S 訳］、［D 訳］と表記する。

考察対象として『清兵衛と瓢箪』を選定した理由は、次のとおりである。第一に、原典に対して、互いに近接した時期に発刊された 2 種類の英訳版の存在が挙げられる。英訳版が複数あることによって、原典と英訳版のみならず、必要に応じて、英訳版どうしの比較考察が可能になることが利点であるのは言うまでもない。また、これらの英訳版が世に出された時期が近接していることによって、それぞれの翻訳者が翻訳時に受けたであろう時流や社会情勢の影響の相違が縮減されると考えられることも、積極的な理由の一つになる。複数の翻訳者による複数の翻訳版が存在する時、それぞれの翻訳版が世に出された時期が近接していればいるほど、それら翻訳版どうしの相互比較がより近似した条件で客観的に行うことができるのは当然のことである。

第二に、本作とその英訳版を比較検討した時、第 1 節で挙げた翻訳の諸問題が豊富に見出され、分析や考察に資する材料を十分に提供することが挙げられる。とりわけ、＜誤訳＞と＜固有の風物・表現＞の問題に対しては、興味深い事例が多く見られる。それは、本作が大正初期の 1913 年に発表されたのに対して、英訳版が世に問われたのはそれから実に 65 年以上も経過した、昭和も後半の時期であるからだ。この長い年月の差は、われわれ日本人にすら、当時は普通に用いられていた語彙、また当時は一般的に存在していた日本固有の風物や表現に対する理解を難しくさせるし、時には誤解や無知すら生じさせうる。まして日本人でない上記の翻訳者 2 名が、翻訳の際にこれらの問題に遭遇していたであろうことは、むしろ当然ですらあっただろう。本稿において、原作と翻訳版が同時代ではなく、65 年以上もの差を隔てたものどうしをあえて比較考察の対象として選んだのは、まさにこの点ゆえである。

そして第三に、原典における本作のテーマや根幹に関わる箇所の英訳そのものが、第 1

節で挙げた翻訳時における4つの問題点、とりわけ本稿での考察の中心となる＜誤訳＞と＜固有の風物・表現＞に関する問題をはらんでいることが挙げられる。本作に関する先行論考はそれほど多くなく、それらはおおむね「他の志賀の初期作品同様、志賀と父との父子対立が、本作品創出の動機になっている」と結論づけている[3]。そして、そうした対立は本作において、キーワードである「瓢箪」に対して抱く価値観が、大人たちと子供である清兵衛との間で対立したものとして具現化されることになる。であるならば、この「瓢箪を介した大人たちと子供の対立」が描写あるいは含意されている部分は、読者が本作を鑑賞する時、最も精確かつ深く理解すべきところである。ところが、具体的には第4節の分析で述べるように、原典の英訳そのものだけでは、翻訳版の読者をそのレベルまでの理解へ導きえないという本質的な問題が生じてしまっている。そして、それは同時に、原典に対する翻訳文そのものとは別に、独立した訳注を欄外や巻末に充実させることが肝要であるという本稿独自の帰結に、やはりつながるのである。

以上の理由をもって、本稿で掲げた翻訳の諸問題を考察するにあたり、『清兵衛と瓢箪』およびその英訳版を、その対象として選定したものである。

3．翻訳に際しての諸問題

本節では、本稿で取りあげる翻訳に関する4つの問題点を、次節における考察・検討に先だって具体的に述べておく。これらは、およそ翻訳者ならば誰もが翻訳に際して直面しうる問題であると同時に、ある言語から別の言語へ作品世界を構築しなおす際に宿命的に付随する、翻訳等価性の問題に関与しているものである。

1. ＜語句の意味範囲のずれ＞の問題

   原典の語句の意味を正しく解釈し、なおかつそれに相当しうる、またはそれに近い訳語をあてているものの、両言語の語句の意味する範囲が、そもそもずれているという問題。ただし、原典言語の語句に意味範囲が全く同じで、意味的に完全に等価である語句が、翻訳言語においても存在するということはほとんどないので、このような結果を招かざるをえない場合は多々ある[4]。

2. ＜誤訳＞の問題

   これは、基本的に翻訳者自身が、翻訳のいずれかの段階で誤りを犯し、結果的に誤った訳語があてられてしまうという問題である。

   a. ＜訳語選択の誤り＞の問題

      原典の語句の意味を正しく解釈しているにもかかわらず、訳語を選択する段階で、誤った訳語をあててしまっている場合。

b. ＜原語解釈の誤り＞の問題

原典を解釈する段階で、語句の意味そのものを誤解してしまい、その誤解した意味に対応する訳語をあててしまっている場合。

3. ＜固有の風物・表現＞の問題

原典言語の国やその国の文化に固有の風物・習慣・風俗が、作品において登場する場合に、当然の帰結として、翻訳言語によるそれ自体の翻訳は不可能となるという問題。このような場合には、それに類似・近似・代替する事物を表わす語彙や表現をあてるくらいしか方法がない。ただし、この＜固有の風物・表現＞が、作品のキーワードになっていて、作品のテーマや根幹に関わっているような場合、第4節で詳述するように、単に翻訳言語における類似・近似・代替表現をあてるのみで済ませるのは、問題がある[5]。なお、第4節で述べるように、原典言語の方言の翻訳も、この問題に属するものである。

4. ＜訳出せず＞の問題

原典において存在していた語彙や表現に対応する訳語が、翻訳版において存在していないという問題。これには、翻訳者が意図的に訳出を行わなかった場合と、何らかの理由で、訳出そのものが困難あるいは不可能であった場合とがある。

文学作品翻訳に関わるこれら4つの問題は、古くはサイデンステッカー・那須（1962）から中野（1994）にいたるまで、これまでの日英語翻訳の比較研究でも、実例を示す形でたびたび取りあげられている[6]。しかし、本稿ではこれらの問題を提示するのみならず、翻訳版の読者が原典において構築されていた作品世界を精確に味読するために、従来の翻訳版の多くにおいてなされてこなかった、あるいは軽視されがちであった訳注の拡充の必要性を強く主張する点が異なる。この点を常に念頭に置きつつ、次節では、『清兵衛と瓢箪』とその英訳版2編において、以上で挙げた問題点が生起している箇所をいくつか抽出し、比較考察を進めていきたい。

4．考察と検討

本節では、第3節で挙げた翻訳上の諸問題が、『清兵衛と瓢箪』とその英訳版2編において生起している箇所について、詳細な考察を遂行していく。その際、問題が生じた原因を確認するのはもちろん、どういう点で問題なのかを、日本語と英語それぞれの語義の比較や、作品成立当時である大正初期の日本の文化や社会的背景をも考慮することによって、さらには作品解釈にも踏み込むことによって、明らかにしていく。その上で、そうした翻訳版の読者が翻訳版を味読する際に、原典において構築されていた作品世界をできる

だけ精確に理解するのに資するような措置も、あわせて述べることにする。

まず、この作品の原題に含まれ、かつ作品のキーワードというべき「瓢箪」とその英訳そのものに、問題が現出している。以下を比較してみる。

(1)

［原典］　これは清兵衛と云う子供と瓢箪との話である。(68)

［S 訳］　This is a story about a boy named Seibei and gourds. (138)

［D 訳］　This is the story of a boy called Seibei and his gourds. (35)

そもそも日本語の「瓢箪」に対して、[S 訳]も[D 訳]も、原題のみならず作中で一貫して“gourd”という訳語をあてているが、これら両者が厳密に対応するかというと、そうとも言い切れない。日本語の「瓢箪」とは、「ウリ科の一年草。ユウガオの変種。果実は中間部がくびれ、熟すと果皮が硬くなる。」(『大辞林』) というものである[7]。これに対し、“gourd” とは、“1. Any of several trailing or climbing plants related to the pumpkin, squash, and cucumber and bearing fruits with a hard rind. 2. The fruit of such a plant, often of irregular and unusual shape.”(*The American Heritage Dictionary*) と定義される[8]。そしてこの定義からもわかるように、“gourd” は「瓢箪」よりも多くの種類の植物あるいは果実の類を指し、またその形も、「中間部がくびれている」場合も含めて、もっと種々雑多で変則的な形のものまでも広範囲にカバーする。つまり、日本語の「瓢箪」という語の意味範囲は、英語の“gourd”という語が意味しうる範囲よりもずっと狭い。言い換えれば、両言語の間で、＜語句の意味範囲のずれ＞の問題が生起しているのである。したがって、単に“gourd”という語で「瓢箪」に対応させてしまうと、英訳版の読者が、日本語でいうところの「瓢箪」を厳密にイメージしうることが保証されるとは言い切れないであろう。とりわけ、清兵衛にとっては、この「中間部がくびれている」という特性がきわめて重要なのである。それは、原典における次のような記述から明らかである。

しかも彼の持っているのは大方いわゆる瓢箪形の、割に平凡な格好をした物ばかりであった。(70)

日本語で「いわゆる瓢箪形」というのは、まさに「中間部がくびれている形」を意味する。したがって、ここではその特性が決定的に重要である。ところが、これに対応する表現として、[S 訳]では“gourd-shaped”(139)、[D 訳]では“gourd shape”(36)と単になされているだけである。これでは、上述したように、“gourd”は種々雑多な形のものを連

想させてしまうから、「瓢箪形」の訳語としては、その意味範囲が広すぎるのである。「瓢箪」は本作においてキーワードであることからしても、「中間部がくびれている」という特性を含め、ここは英訳版でも、日本語の「瓢箪」、特に清兵衛にとっての「瓢箪」について、詳細な訳注による厳密な形容が欠かせないところである。

(2)

［原典］ 三四銭から十五銭位までの皮付きの瓢箪を十ほども持っていたろう。(68)

［S 訳］ He had already acquired about ten of them, ranging in price from a few sen up to fifteen sen apiece. (138)

［D 訳］ He must have bought as many as ten, with the skins on, ranging in price from three or four sen to as high as fifteen sen. (35)

ここでは「皮付きの」とその英訳について考察する。まず、[S 訳]ではそもそも「皮付きの」に言及がないが、これは問題である。なぜならば、「彼は古瓢には余り興味を持たなかった。まだ口も切ってないような皮つきに興味を持っていた」(70) とあるように、清兵衛が瓢箪を選定する際の基準として、新しい「皮付きの」ものというのが必須の要素となっているからである。この点に関し、池内 (1990) は、12 歳の子供である清兵衛がこうした「人の手の加わらない素朴で自然かつ安価な、まだ皮付きの新瓢に興味を抱いた」のに対して、「古瓢とは、骨董品であり、値段も高く、年数を経、名品として権威づけられていたもの」であり、清兵衛の父をはじめとする大人たちがこうした「伝統的な瓢箪にこそ特別な価値を置いている」と喝破している。そしてその上で、子供である清兵衛と大人たちとの間に、瓢箪を介した価値観に根本的な対立ともいうべき相違があると指摘している[9]。この点で、新瓢であることの根拠となりうる「皮付き」という文言が[S 訳]において訳出されていないのは、本作の根幹に関わってくる部分であり、＜訳出せず＞という重大な問題をはらんでいるといえよう。

次に[D 訳]を見てみると、“with the skins on” という表現で「皮付き」に対応させている点は[S 訳]よりも評価できる。ただし、「皮」に “skin” をあてているのは問題であろう。なぜならば、“skin” は、どちらかというと植物よりも動物の皮を意味するし、植物にあてはまるとしても、“A usually thin, closely adhering outer layer” (*AHD*) の意味であって、「瓢箪」がその特性として備えているような分厚くて硬い皮のイメージとは程遠い。その証拠に、(1)の “gourd” の意味記述で、“... with a hard rind” とあり、“skin” ではなく “rind” を用いている。さらに、“rind” とは “the tough outer skin of certain fruit, especially citrus fruit” (*Oxford Dictionary of English*) を意味する[10]。このことから

考えると、瓢箪の「皮」に対する訳語としては“skin”ではなく“rind”をあてる方が適切である。もし、“skin”を使う場合であっても、その修飾語として“hard”や“tough”は必須であろう。つまり、[S 訳]が「皮付き」という文言に対応する表現そのものが欠落しているという＜訳出せず＞の問題であるのに対して、[D 訳]は日本語の「皮」に対する＜訳語選択の誤り＞の問題であるといえる。

なお、[D 訳]については、＜語句の意味範囲のずれ＞の問題も関与している。それは以下の北條（2004）の指摘が根拠となる[11]。

> たとえば「皮」という概念は英語では日本語におけるよりもはるかに細分化されている。……皮膚や果物の薄い皮は skin、メロンや南瓜の厚い皮は rind……というように、「何々の皮」というか、あるいはせいぜい「皮膚」とか「樹皮」というふうに「皮」に付け足しをするのではなく、それぞれをさす個別のことばが英語には存在する。

そもそも、日本語では「何々の皮」といった付け足しをしなくても、皮をまとっている対象物を問わず、単に「皮」というだけで事足りる場合も多い。つまり、日本語の「皮」の指す意味範囲は、それに対応する英語の個々の語句よりも相当に広いということになる。このことを念頭に置きつつ、本作において「皮」を英訳する時には、あくまで「瓢箪の皮」に対応した訳語として“rind”を選択するのが最も自然である。Dunlop が“skin”を選択してしまったのは、＜訳語選択の誤り＞であると同時に、日本語の「皮」に対する英語の“skin”の意味範囲が狭い、つまり使用範囲や対象が限定されるといった観点の＜語句の意味範囲のずれ＞の問題をもはらんでいるといえるだろう。なお、この「皮」と“skin”との意味範囲の広狭は、(1)の「瓢箪」と“gourd”との意味範囲の広狭と、日本語と英語との間で逆の対応関係にあるものの、同じく＜語句の意味範囲のずれ＞の問題として収斂することは言うまでもない。

(3)

[原典]　堪らなくなって笑いながら彼は半町ほど馳けた。(69)

[S 訳]　He went on laughing uncontrollably as he ran along for a tenth of a mile and more,... (139)

[D 訳]　Laughing like crazy, he ran for half a block. (35)

「町」というのは距離を表わす単位で、日本ではメートル条約加入後の 1891 年に 1 町を約 109.09 メートルと定めたものである[7]。ただし、現在ではほとんど用いられない単位で

あるため、本作を収録した『志賀直哉』でも、「一町は約百十メートル」と注記がなされている[12]。ということは、「半町ほど」とは、約55メートルということになる。ここで[S訳]を見てみると、これに対応する英訳として“a tenth of a mile and more”とあるが、これは誤訳といってもよい内容である。というのも、1マイルは約1609.34メートルであるから、“a tenth of a mile and more”とは少なくとも160メートル以上ということになり、原典の約3倍の距離になってしまうからである。この点、[S訳]は原典の「町」が距離を表わす単位であること自体は正確に認識しているものの、「町」に正確に対応する距離をあてなかったという意味で、＜誤訳＞の、より詳細には＜訳語選択の誤り＞の問題をはらんでいるといえよう。

一方、[D訳]では、「半町ほど」を“half a block”と表現している。“block”とは“A usually rectangular section of a city or town bounded on each side by consecutive streets”（*AHD*）のことであり、いわゆる道路で区切られた街区を指すのであって、距離そのものの概念はない。ここで、原典の次の記述に注目したい。

> 清兵衛のいる町は商業地で船つき場で、市にはなっていたが、割に小さな土地で二十分歩けば細長い市のその長い方が通りぬけられる位であった。（70）

もしDunlopが、(3)での「町」を、距離を表わす単位ではなく、このいわゆる人々が生活を営む場としての「町」として解釈したならば、町の半分程度を走ったと考えることもできなくはない。しかし、だからといって町の半分のことを「半町」と言うのかどうかに疑義が生じるし、そもそも“block”とは、上の意味記述からして、あくまで町の一部をなす区画のことであるから、＜「町」＝“block”＞という図式は成立しない。したがって、たとえ人々の生活の場としての「町」の半分を走ったという意味であったとしても、“half a block”という英訳は適切ではないといえる。やはりここは、「町」が距離を表す単位であると考え、“mile”ないしは“meter”で対応する距離を表現した方が、より原意に即した解釈となるだろう。この意味で、[D訳]では、“block”という訳語をあてていることからしても、「町」を距離を表わす単位ではなく、人々の社会生活の場としてとらえてしまったと考えられる。この点において、これは＜誤訳＞の、より厳密には＜原語解釈の誤り＞の問題であるといえよう。なお、少なくとも「町」が距離を表す単位であると認識している点で、[S訳]の方が[D訳]よりも相対的に原意に近いといえる。

距離と同様に、長さを表わす単位でも、正確な変換が行われていない場合がある。以下は、清兵衛が店でお気に入りの瓢箪を見つけた時のくだりである。

(4)

［原典］ 中に一つ五寸ばかりで一見ごく普通な形をしたので、彼には震いつきたいほどにいいのがあった。(72)

［S 訳］ ... he discovered a gourd no more than six inches long, of a quite ordinary, regular shape — so perfect that he could hardly keep himself from scooping it up then and there. (140)

［D 訳］ Among them was one about five inches around, at first sight of such an ordinary shape that he wanted to hug it, it was so good. (37)

1 寸は約 3.03 センチメートルであるから、「五寸ばかり」とは約 15.15 センチメートルとなる。さらに、1 インチは 2.54 センチメートルであるから、[S 訳]の“no more than six inches”とは「ほんの約 15.24 センチメートル」となり、ほぼ原典の「五寸ばかり」に対応しているといえる。これに対し、[D 訳]の“about five inches around”は「約 12.70 センチメートル」となり、やや短い長さのものを連想させてしまう。このくらいの差異ならば誤差の範囲内であるといえなくもない。しかし、Dunlop が「寸」の正確な解釈を誤った可能性も、全面的には排除できない。その場合には、上の(3)での Sibley の場合同様、＜訳語選択の誤り＞の問題をはらんでいるといえる。いずれにせよ、翻訳ができる限り原典と等価な、あるいは原典に忠実な結果を求める姿勢を貫くのならば、こうした微細な点にも、細心の注意を払わなければならない。

(5)

［原典］ 彼は町を歩いていれば骨董屋でも八百屋でも荒物屋でも駄菓子屋でもまた専門にそれを売る家でも、およそ瓢箪を下げた店と云えば必ずその前に立ってじっと見た。(69)

［S 訳］ Wherever gourds were sold around the town, antique shops, vegetable stands, dry goods stores, even sweetshops, not to mention the odd establishment specializing in these curios, he would stop and gaze transfixed. (139)

［D 訳］ ..., when walking in town, he would always stop to gaze at any shop with gourds hung from the eaves, be it an antique shop, a kitchenware store, a candy store, or a shop that specialized in gourds. (35)

北條（前掲書）では、「ある文化ないし、ある国に固有の風物、習慣、風俗はしばしば

翻訳不可能という問題をもたらす。……日本固有の風物の翻訳のむつかしさは依然存在している」と述べている[13]。本作が志賀によって発表されたのは1913年（大正2年）のことであった。当時の日本の町並みで、「骨董屋」・「八百屋」・「荒物屋」・「駄菓子屋」が軒を並べていることは、ごく自然な風景であった[14]。というより、これらの店は、時代的な面から見ても、当時の日本固有の風物であったといえる。これらがどのように英訳されているかをここでは検討してみたい。

まず、「骨董屋」については、[S訳]・[D訳]ともに“antique shop”と訳しているが、これについては特に問題はないだろう。次に、「八百屋」であるが、[S訳]では“vegetable stand”とある。*AHD*によると、“stand”の意味は“A booth, stall, or counter for the display of goods for sale”であるから、大正時代の一般的な八百屋の描写として“vegetable stand”は、厳密に「八百屋」に対応するかについては多少の議論の余地があるけれども、よく原意を汲み取った適訳といえよう。これに対して、[D訳]では「八百屋」に対応する表現自体が見当たらない。これは、当時の日本の一般的な八百屋が、店というよりはむしろ、道端で野菜類を売る小規模な露店に近い、いわばその時代の日本固有の風物ともいうべき形態をとっていたことに一因があろう。つまりDunlopは、こうした形態の「八百屋」そのものに適切に対応する英語を見出せなかったのであろう。このため、結果として[D訳]では＜訳出せず＞の問題が生起している。その意味では、北條の言うように「日本固有の風物の翻訳のむつかしさが存在している」のであろうが、しかし、Sibleyのような適訳も考えうるはずである。やはり翻訳者の姿勢としては、できるかぎり原意を汲み取った訳出を積極的に行うことが求められる。あるいは、本例のように訳出がきわめて困難な場合であっても、詳細な訳注を付けるなどの配慮が望まれる。単に＜訳出せず＞では、翻訳版の読者には何も伝わらないからだ。

次に、「荒物屋」について見てみよう。『大辞林』や『広辞苑』の記述によると、「荒物」とは「日常生活に使う雑多な品物。ざる・桶・はたき・ほうき・ちりとりなど。雑貨。」とある[15]。このことから、「荒物屋」とは掃除を中心とした日常的な身のまわりの整理整頓に使う物を売っていた店ということになる。これに対して、[S訳]では“dry goods store”とし、[D訳]では“kitchenware store”としているが、これらは両方とも誤訳といわざるを得ない。まず[S訳]の方から考えてみると、そもそも“dry goods”とは“1. solid commodities traded in bulk, such as tea, sugar and grain. 2. drapery and haberdashery.”（*ODE*）、“Textiles, clothing, and related articles of trade”（*AHD*）を意味し、日常食品や服飾品を表わすことはあっても、少なくとも日本語の「荒物」のような生活雑貨を意味することはない。したがって、英訳版の読者は、原典とはかなり違った店を想像することになりかねない。一方、[D訳]における“kitchenware”は、“the utensils used in a

kitchen.”（*ODE*）、“Utensils such as pots, and pans, for use in a kitchen”（*AHD*）を意味し、主に台所で使う食器類の総称であるから、これもまた「荒物」とは程遠いものであり、英訳版の読者を誤解へと導きかねない。

これらの誤訳の原因としては、やはりSibleyもDunlopも「荒物」の意味自体を誤認していたという推測がまず成り立つ。その場合、ここでもまた＜原語解釈の誤り＞の問題が内在していることになる。ただ、彼らが「荒物」の意味を誤認していたというよりも、そもそもその言葉自体を知らなかった、あるいは彼らの翻訳当時には、すでにほとんど見聞きされない言葉であったという要因も考えられる。というのも、[S訳]が世に出たのは原典が発表されてから66年も後の1979年（昭和54年）であり、[D訳]にいたっては74年も経った1987年（昭和62年）のことだからである。この頃にはすでに日本人の間ですら、特に若者の間においては、「荒物屋」とはもはや死語に近く、同じような形態の店はむしろ「雑貨屋」と呼ぶようになっていた。またSibleyやDunlopが翻訳当時に「荒物屋」という言葉自体を知らなかったとしても、不思議ではなかろう。この点、原典が生み出された時期と翻訳者がその翻訳版を世に出した時期が大きく離れている場合、原典が生み出された時代・社会には一般的であった風物が、翻訳した時代・社会にはほとんど認識されない、あるいはすでに廃れたものである場合がある。そしてその際には、翻訳者による＜原語解釈の誤り＞よりも、むしろ時代の格差からくる＜原語に対する無知＞という問題をはらむ可能性があるのである。さらにもう一つの可能性として、「荒物屋」そのものが、当時の日本社会に固有の風物であったがゆえに、そもそもこれに厳密に対応する英訳が存在しえないという点で、第3節で挙げた＜固有の風物・表現＞の問題ととらえることもできよう。

とはいえ、上記のいずれが原因であったにせよ、可能な限り、原典が生まれた時の文化・社会的背景に対する認識をも深めたうえで、誤訳を避けるのはもちろんのこと、できるかぎり原語の意を汲み取った訳語をあてることが、翻訳者の姿勢として求められることもまた当然である。

最後に、「駄菓子屋」について検討する。「駄菓子」の意味として、『大辞林』では「粟・麦などの雑穀や黒砂糖でつくった、素朴で安価な雑菓子」とし、『広辞苑』では「粟・豆・くず米などの安価な材料を用いた大衆的な菓子」と記述している。また、「駄菓子」は別名「一文菓子」とも呼ばれていた。これらのことからして、「駄菓子」が当時の日本の一般庶民、とりわけ子供たち向けの、国内産の原料を用いてつくられる安価な菓子であったことがわかる。これはまさに、当時の日本に固有の風物の一つであったといえる。となると、北條の言うように、翻訳者にとっては対応する訳語を見出すのがきわめて困難な作業となる可能性があっただろう。

さて、実際の英訳を見てみると、[S 訳]では“sweetshop”、[D 訳]では“candy store”の訳語をあてている。しかしもちろん、これらは両方とも、原典の「駄菓子屋」には対応しない。“sweet”とは“Foods such as candy, pastries, puddings, or preserves, that are high in sugar content.”(*AHD*)のことであるし、“candy”とは“A rich, sweet confection made with sugar and often flavored or combined with fruits or nuts.”(*AHD*)とされ、ODE では“sweet”と“candy”は同義語として記述されている。いずれにせよ、これらは両方とも、砂糖や場合によっては果物を主原料とした、いわゆる西洋菓子のことであるから、これらの語句でもってして日本語でいう「駄菓子」を英訳版の読者にイメージさせるのはまず不可能である。とはいえこれは仕方のないことで、「駄菓子」は大正期を含む昔の日本固有の風物であるから、厳密にこれを表現しうる英語が存在するはずはないのである。こうした翻訳において、第 3 節で述べた＜固有の風物・表現＞の問題が発生するわけである。

とはいえ、安易に＜訳出せず＞で済ませてはさらに問題である。そこで翻訳者としては、自分にできる最大限の仕事、すなわちできるだけ日本語と英語で共通する属性を見出し、それを表わす語彙や表現でもって、あるいは第 3 節の 3. で述べたように、それに類似・近似・代替する事物を表わす語彙や表現をあてることによって、原典の表わすところの何割かでも、どうにか表現するということが求められよう。ここではもちろん、その共通属性とは「菓子」ということになろう。ただし、上述したように、“sweet”や“candy”では、読者は「駄菓子」とはかけ離れた西洋菓子を想像してしまうだろう。その時点で、読者は大正初期の日本の風物をイメージすることはできなくなる。したがって、原典に描写された当時の日本社会の雰囲気を少しでも伝えるためにも、「瓢箪」に対する“gourd”の場合同様、「駄菓子」に関するていねいな訳注を期待したいところである。

(6)

[原典] 手入れが済むと酒を入れて、手拭で巻いて、鑵に仕舞って、それごと炬燵へ入れて、そして寝た。(69)

[S 訳] When the cutting and cleaning out were done, he poured sake into the gourd, wrapped it in a towel, and placed it in a metal container, which he then stuck into the charcoal footwarmer for the night. (139)

[D 訳] When it was ready, he would pour in the sake dregs, wrap it in a towel, and after putting it in a can place it in the sunken hearth. (36)

ここでの「炬燵」が、およそ西洋文化にはない、日本固有の風物であることは言うまで

もない。そうすると、この「炬燵」の、しかも大正初期のそれのイメージを、どの程度精確に伝えることができる英語表現が存在するかが問題になるし、またそれをひねり出すのが翻訳者の仕事であり、技能の発揮どころであるといえる。

さて、明治末期から大正初期の炬燵は、現代に見られるような電熱式の炬燵とは異なり、熱源にもっぱら木炭や豆炭を用いる炭焼き式であった。ただし、その形状は「床を切って炉を設け、上にやぐらを置き、布団をかけて暖をとるもの」(『広辞苑』)であって、現代の炬燵とほぼ変わらない形状を備えていた。また、当時の木綿の普及とあいまって、置き炬燵が明治時代40年余を通じて広く農村の間で使われるようになっていたが、これは床を切らずにつくった移動式炬燵のことである[16]。

いずれにせよ、このことから、清兵衛の炬燵が炭を熱源としていたことは間違いないであろうから、[S訳]において“charcoal”を用いたところは、当時の炬燵の熱源を的確に表わしているとして評価できる。ただし、“footwarmer”とは、いわゆる湯たんぽや足温器のことである[17]。したがって、“charcoal footwarmer”では、熱源は表わしえても、形状までは読者にイメージさせることが難しいと考えられる。

一方、[D訳]はどうか。もし、清兵衛の使っていたものが、いわゆる掘り炬燵であったならば、“sunken”という語がそのイメージをよく表わしているといえる。ただし、“hearth”とは“The floor of a fireplace, usually extending into a room and paved with brick, flagstone, or cement.”(*AHD*)であり、設置場所や方法・材質・大きさ・形状のすべてにおいて、炬燵とはかけ離れたものである。したがって、これもまた大正初期の日本の炬燵を読者にイメージさせることは困難であろう。

以上の考察からもわかるように、ここでもやはり、日本の、さらにその特定の時代の＜固有の風物・表現＞の問題が存在している。「炬燵」に対応する、あるいはそれを厳密に表わしうる英語の表現は当然に存在しない。また、翻訳者によってあてられた苦心の表現も、上で見たように、原典の設定や背景を精確に伝えきるには、到底及ばないものである。清兵衛が瓢箪に執着ともいうべき興味を示していることは、本作の描写の中心である。そして、その瓢箪を自分の嗜好に合うように、どのように加工するかを詳述しているこの部分は、本作の味読には欠かせないところである。それゆえに、その一翼を担う「炬燵」については、読者が当時のものを精確にイメージできるよう、詳細な訳注が望まれるところである。

(7)

［原典］ それを受持の教員が見つけた。修身の時間だっただけに教員は一層怒った。(73)

［S 訳］ In the end he was caught at this by the teacher, who was particularly indignant that such a thing should happen during the moral training period. (140)

［D 訳］ The teacher detected him. It being the ethics class, he was all the more infuriated. (37)

「修身」とは、当時の日本の教育制度独自の教科だったようである。須藤（1977）は、この「修身」について、単に「今の道徳」としているが、これはそれだけの説明で済むほど単純ではない[18]。原典の注記には、「旧制の小中学校で教えた教科の一つで、今の道徳にあたる」と、それよりもやや詳しい記述があるが、これも単に現代に存在する教科に置き換えて説明を施しているにすぎない[19]。現代の道徳と大正時代の「修身」とは、その趣旨も中身も目的も大きく異なるはずであり、本作を味読する上ではその意味をも精確に理解しなければならない。なぜならば、本作では、キーワードである瓢箪に関して、子供である清兵衛と大人たちとの間に価値観の対立が見てとれるが、ここではそこからつながる形で、「修身」を軽んじて瓢箪磨きにいそしむ子供の清兵衛と、「修身」を最重要教科と位置づけ、瓢箪に価値を見出さない大人の教師との間に価値観の対立が見てとれるからである。実際、「修身」が「全学科ヲ通ジテ要用ナルモノ」として、とりわけ「教師ノ言説及ビ挙動ニ（児童は）注目スベシ」という要項が当時あったという指摘もあるくらいである[20]。つまり、教師にとって「修身」の時間に自らの言動を無視されることは、教師としての威厳が損なわれ、大人としての自尊心をこの上なく傷つけられることにもなるのだ。であればこそ、なおさらに教師は憤慨したのである。

こうして本作のテーマにも深く関わってくる「修身」であるが、それは当時の国家としての日本が目指していた天皇制家族国家のイメージが具現化されていたものである[21]。となれば、「修身」とは完全に日本の、しかも当時の日本に固有の風物ともいうべきものであり、これに対応した英語表現は、もちろん、ありえないことになろう。そこで、できるだけ原意を汲みとった訳が求められるが、すでに諸例で見てきたように、ここには日本の特定の時代の社会に＜固有の風物・表現＞が存在しているから、そのような訳はほぼ不可能なのである。たとえば[S 訳]では“moral training”としている。「修身」が児童に（思想信条を）教え込み、指導するといった点では、“training”という訳語をあてたのは、よくイメージをとらえた適訳であろう。しかし、“moral”とは“standards of behavior;

principles of right and wrong”（*ODE*）を意味し、当然ながら、そこから当時の日本特有の風物・思想であった天皇制家族国家の意味合いは、読者は一切感じ取ることはできない。むしろこれは現代の「道徳」の意味を説いた記述であるといえる。[D 訳]でも事情は同じで、“ethics”とは“The rules or standards governing the conduct of a person or the members of a profession”（*AHD*）を意味しており、これそのものが、「修身」の中心的概念である「天皇制家族国家」を表わすことは不可能である。これが翻訳の限界の一つであり、繰り返しになるが、こうした原典における＜固有の風物・表現＞の問題が、作品味読の根幹に関わりうる場合には、やはりその理解を助けるに足るだけの、十分に詳細な訳注が別に必要であろう。

＜固有の風物・表現＞には、日本のある地方に特有の方言もまた、当然に含まれよう。たとえば以下の(8)における方言は、英語ではどのように表わされているであろうか。

(8)

[原典]「清公。そんな面白うないのばかり、えっと持っとってもあかんぜ。……」(70)

[S 訳] “Look, here, my boy,” said the carpenter, “what's the point of stocking up on gourds like that, so plain and ordinary. ...”（139）

[D 訳] “Sei-boy. It wouldn't do just to bring home that uninteresting kind of gourd. ...”（36）

方言を翻訳することの難しさについては、北條（前掲書）も指摘しているところであるが、少なくとも、その方言の意味するところを正確に理解したうえで翻訳しなければ、読者を原典における意味の正しい理解へと導くことはできない[22]。ここで用いられている「えっと」は方言であり、原典の注記によると、「たくさん」を意味するとのことである[23]。事実、本作の舞台であろうと推定される尾道と同じく中国地方である岡山県や鳥取県で、この方言がこうした意味で使われていたとする指摘がある[24]。そうすると、原典の下線部は、「(瓢箪を）たくさん持っておく」・「たくさん（手元に）とっておく」といった意味になる。

これに対する英訳であるが、まず[S 訳]では、“stock up on”という表現を用いている。これは“To gather and lay in a supply of something”（*AHD*）、“amass supplies of something, typically for particular occasion or purpose”（*ODE*）とあり、「(同種の）あるものを、何かの時や目的のために（大量に）集めておく」という意味である。この意味記述からして、“stock up on”が「たくさんとっておく」に非常に近いニュアンスを出しているといえる。したがって、[S 訳]は方言である「えっと」の意味を正確に理解したうえで、その

意味を汲みとった適訳をあてていると判断できる[25]。日本の、しかもその特定の地方に固有の表現である「えっと」であるが、Sibley はその意味が「たくさん」であることを正確に理解し、その結果、適訳を生み出すことができたのであろう。

これに対して、[D 訳]では単に“bring home”としているにすぎず、これでは「(購入した瓢箪を）家に持ち帰る」といった意味合いしか出せていないことになる。たしかに、「清兵衛が……皮つきの瓢箪を十ほども持っていたろう」(68）や「教員のすぐ後ろの柱には手入れの出来た瓢箪がたくさん下げてあった」(74）など、別の箇所の記述から、清兵衛が自分の家に瓢箪を大量に集めておいたのは事実としてわかる。よって、瓢箪を買って家に持ち帰っているのは少なくとも間違いないから、この点だけを考慮に入れるならば、“bring home”という表現をあてて済ませてしまうことになる。しかし、(8)は、清兵衛の家を訪ねてきた大人の客が、清兵衛が集めている瓢箪に関して否定的な見解を表明しているくだりである。すでに述べたように、子供である清兵衛と大人たちとの間には、瓢箪を介した価値観に如何ともしがたい対立がある。この客は、清兵衛が大人の自分にとっては無価値としか言いようがないような類の瓢箪を好んでいるだけでなく、「たくさん集めている」のが余計に気に入らないのである。だからこそ、「えっと持っとってもあかんぜ」と批判し、嘲笑するのである。こうした側面は、“bring home”というだけでは、翻訳版の読者に伝わらないであろう。少なくとも、ここで批判の的となっている「たくさん（集めている)」のニュアンスが伝えきれていない。つまり、[D 訳]においては、この文脈で重要な、「たくさん」を意味する方言である「えっと」を＜訳出せず＞の問題が生じているのである。あるいはこれは、この方言が当時の日本の特定の地方に固有の表現であったがゆえに、Dunlop がそもそもそれに対応する英語の表現が存在しえないと考えたのであろうと、帰せられるかもしれない。ただ、実際には「えっと」が標準的な日本語で「たくさん」を意味するということがわかっていれば、Sibley のような適訳をあてることが可能だったはずである。方言といえども、いや方言であるからこそ、きちんとその意味を理解したうえで訳出することが、本例のように作品理解の上で重要な要素として絡んでくる場合には、必須であるだろう。

5．考察のまとめと結語

以上、『清兵衛と瓢箪』を原典とし、その英訳版 2 編を比較しながら、＜語句の意味範囲のずれ＞・＜誤訳＞・＜固有の風物・表現＞・＜訳出せず＞の 4 つの問題について、実例を確認しつつ、考察を進めてきた。これらの問題は、そのまま翻訳版の読者が作品を精確に味読するのに支障を及ぼしうる場合もある。翻訳が翻訳者の目を通した、原典とは異なる言語を用いることによる作品世界の再構築の側面を持つ以上、原典において展開され

ていた作品世界を翻訳言語によって完全には再現できないことは、避けようのない帰結である。だが、そうであるからこそ、翻訳者は全霊をかけて、そうした事態を極小化するような翻訳を生み出さねばならない。それは、原典において用いられている語彙や表現を正しく理解することはもとより、作品が創作された当時の社会や文化に関する深い背景的知識をも持ち合わせていることが要求される。なかでも今回のように、作品の創作時期と翻訳時期が数十年もかけ離れている場合には、それはなおさらのことである。このことは、とりわけ本稿の考察の中心であった＜誤訳＞と＜固有の風物・表現＞の問題に特に当てはまるのであった。

そしてその上でなお、翻訳版の読者の理解に支障や誤解が生じうるような場合、とりわけそれが作品におけるキーワードや作品のテーマ・根幹に関わるような場合には、やはり翻訳版において、原典に対する翻訳文そのものとは別に、充実した詳細かつ厳密な訳注を、欄外や巻末に付けるなどすることが肝要である。そのような、あくまで翻訳版の読者が原典の作品世界を精確に理解するのを可能にする、あるいは少なくとも手助けするような配慮が望まれるのである。本稿の考察でも垣間見たように、たった一つの語彙や表現が作品のキーワードとなっていて、作品のテーマや根幹の理解に必要不可欠な場合があった。そしてそれが的確に翻訳されていなかった、あるいは不十分であったがために、結果的に翻訳版の読者の作品理解も不十分となる、あるいは読者に違ったイメージを与えるなどして誤解に導いてしまう場合すらあるのである。

今後も幾多の作品が、英語をはじめとするさまざまな言語に翻訳されていくであろうが、その場合には、翻訳者の深い知識や真摯な姿勢はもはや前提条件である。もとより、それには＜誤訳＞や＜固有の風物・表現＞を中心とした諸問題が必然的に伴うとの認識に立ち、上で述べたような訳注の充実など、翻訳そのもの以外で読者を精確な作品味読へ導く積極的な措置を、もっと拡充させる必要があるのである。

注

1　もっとも、どのような訳が正しいとか誤訳であるかといった判断基準は、判断する者自身の個性や知識も絡んでくるので、必ずしも明確にできるものではない。つまり、ある訳としてあてがわれた語彙や表現が適正であるか否かは、その際に選択されなかった他の語彙や表現と比して相対的に判断されるといった性質のものである。この点は、次の多和田（2006）の指摘にも裏打ちされる。

基本的には、あらゆる翻訳は「誤訳」であり、あらゆる読解は「誤読」なのかもしれないと思っています。程度の差はあるでしょうが、それが基本的に程度の差であ

るということで、＜間違っている＞・＜正しい＞という二極に分けて考えることはできません。（多和田葉子「ある翻訳家への手紙」、岩波書店（編）『翻訳家の仕事』、岩波書店、2006 年、p. 171）

2　日英語翻訳の場合においては、日本人でない翻訳者の持つ知識、とりわけ日本語の能力や日本文化に関する知識の度合いが、多少なりとも翻訳時に影響を与える可能性は否定できないところである。しかし、霜崎（2006）が指摘するように、翻訳分析は、そもそも客観的な分析にこたえるだけの質を備えた翻訳を所与のものとして扱うことを前提とするものである（霜崎實「翻訳分析の手順と諸問題」、霜崎實（編）『翻訳論プロジェクト 2005 年度論文集』、慶應義塾大学湘南藤沢学会、2006 年、pp. 21-41）。そして、それには翻訳者の日本語能力や日本文化に関する知識の度合いがある一定水準を満たしていることも含まれる。本稿で扱う英訳版も、そうした前提を持ったものとして考察を進めている。

3　亀井雅司「志賀直哉の短編―その構造―」、『国語国文』、1971 年。
林為龍「志賀直哉の『清兵衛と瓢箪』について」、『早稲田文学』、1984 年。
須藤松雄『志賀直哉―その自然の展開』、明治書院、1985 年。
中島国彦「『清兵衛と瓢箪』の位相―尾道時代の志賀直哉一面―」、『解釈と鑑賞』、1987 年。

4　もっとも、そうであるからといって、原語と意味範囲がずれている訳語すべてが問題となるわけでは、もちろんない。もしそうなら、翻訳版における各々の語彙や表現が、ことごとく問題であるということになり、そもそも翻訳版を通して原典の作品世界を理解しようとすることそのものが、無意味な所作となってしまう。ここで問題となるのは、第 4 節でも述べるように、あくまで作品のキーワードや、作品のテーマや根幹の理解に関わる特に重大な語彙や表現が、意味範囲の点において、原典と翻訳版とで明らかにずれが生じている場合のみである。

5　北條文緒『翻訳と異文化』、みすず書房、2004 年、p. 87 にもこの問題が提起されている。

6　サイデンステッカー，エドワード・那須聖『日本語らしい表現から英語らしい表現へ』、培風館、1962 年。
中野道雄『翻訳を考える』、三省堂、1994 年。

7　松村明（編）『大辞林』、三省堂、1988 年。

8　*The American Heritage Dictionary of the English Language*, Houghton Mifflin, 1992. 以降、“*AHD*” と表記する。

9　池内輝雄『志賀直哉の領域』、有精堂、1990 年、pp. 138-139。

10 Stevenson, A. (ed.) *Oxford Dictionary of English* (3rd ed.), Oxford University Press, 2010. 以降、“ODE”と表記する。

11 北條（前掲書）、p. 20。

12 志賀直哉「清兵衛と瓢箪」、筑摩書房（編）『志賀直哉』、筑摩書房、2008 年、p. 69。

13 北條（前掲書）、p.87。

14 なお、池内（前掲書、p. 135）を含め諸論は、作者側の資料や当時の地図・方言等に関する資料から、本作の舞台となっている場所を、当時の小商業都市であった尾道であると推定している。

15 新村出（編）『広辞苑』（第六版）、岩波書店、2008 年。

16 柳田國男『明治大正史・世相篇』、講談社、1993 年、p. 115。

17 松田徳一郎（編）『リーダーズ英和辞典』（第 2 版）、研究社、1999 年。

18 須藤松雄『志賀直哉研究』、明治書院、1977 年、p. 195。

19 志賀（前掲書）、p. 73。

20 池内（上掲書）、p. 142。

21 桑山敬己「大正の家族と文化ナショナリズム」、季武嘉也（編）『大正社会と改造の潮流』、吉川弘文館、2004 年、p. 239。

22 北條（前掲書）、p.90。

23 志賀（前掲書）、p. 71。

24 岡山県については、桂又三郎（編）『全国方言資料集成　岡山県方言集』、国書刊行会、1976 年。鳥取県については、室山敏昭「鳥取県地方方言の副詞語彙についての基礎的研究」、『広島方言研究所紀要　方言研究叢書』、三弥井書店、1975 年。

25 日本語では「えっと」が動詞「持っとって」を修飾する副詞であるのに対して、英語ではこれに対応する副詞では表現されず、その意味だけが動詞句“stock up on”そのものに内包されてしまっているという構造上の相違があるが、この点に関する考察は別稿に譲る。本稿では、もっぱら意味の対応関係のみに焦点を当てるものである。